本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

結婚道德論

石川生

一、何故に結婚するや

人、何が故に結婚するや、家庭を作らんが爲か、子孫を産まんが爲か、肉慾を滿足せんが爲か、戀愛を滿足せんが爲か、持參金を得んが爲か、榮達を得んが爲か、或は其一を目的とするか、又は其全體を目的とするか。

世に『結婚道德』を高調する者あり、若し今結婚道德てふものありとすれば、其標準は果して何れにあるか、家庭を作らんが爲の結婚ならば、如何なる原因に係はらず、偕に家庭を樂しみ得ざる者の結婚は不道德なるべし、子孫を産まんが爲ならば、『子無き者は去る』といふに及ぶも已を得ざるべし、肉慾の爲ならんには、性交力に懸隔ある者の結婚は不道德とならん、又、戀愛を滿足せんが爲なれば、戀愛の變動によりて結婚は常に變ずべく、兄弟姉妹、叔伯甥の間と雖も、戀愛による結婚は道德的のものとなるべし、持參金、榮達を目的とする塲合も亦た同じ推理を以て論ずるを得べし。

二、世論徹前なり

此頃、田中宮相對小林孝子の問題に就きて世論甚だ喧しかりしが、世の人の之を論ずる、徒らに慢罵嘲笑を事として、採るに足るの議論少かりしが如し、蓋し口に『結婚道德』を唱ふと雖ども、多くは其根本觀念、根本標準を明確にせず、僅かに舊式なる習慣と俗情とを披瀝せしに過ぎざる也、但し吾人は田中問題を評論せんと欲する者に非ず、結婚の根本義を闡明するを得ば足るなり。

三、戀愛は趣味也

吾等は常に戀愛の自由を唱ふ、結婚の自由を主張するは勿論の事なり、男女互に戀したりとて、其が近隣に迷惑を相懸けざる間は、兎や角と嘴を容るべきものに非ず、結婚の場合も亦た同じ、例へば田中宮相が老年の身を以て少女孝子と婚約を結びたりとて、一概に不德と呼はりするは如何のものにや、又、孝子が祖父の如き宮相を良人にせんと決心せりとて、無下に墮落女子といふは如何のものにや、若し宮相と孝子とが倶に眞に相戀しての事なれば、他人が兎や角と申すは如何にも野暮の不粹の至極ならずや、或は若くして老人を好むものあるべく、或は老年にして若きを愛するもあるべく、或は人品少し下りても學識あるを好む者あるべく、或は才氣は優れずとも人品高きを善しとする者もあるべし、素より總てが完全に揃ひたるに越したるは無かるべきも、實際には望むべからず、從て皆な其れ〳〵に自己の趣味と境遇とに應じて其配偶者を選擇するに至るべし、而して吾等は人の趣味を上下評論するとを得べきも其の評論は唯だ吾が趣味を標準としたるに過ぎず、自己の趣味を以て一に之を天下の大道と爲し、更に之を以て他人を羈束せんとするは僭越の甚だしきもの也。

然れども、自己の趣味に從て自由行動を執れる者は之が爲に如何に世間の非難を受けたりとて、決して悔ゆべからず、斯かる結果を見るべきは初めより確く覺悟すべきとなり、又、之が爲に世俗的の地位、名譽を失ふの已むべからざるに至るとも、素より未練を殘すべきに非ず、若し戀愛よりは世俗的地位に執着せんとならば、始めより世俗の同情を受くる如き結婚を求むるに如かず、乍併、此の如きは寧ろ純潔なる戀愛結婚とは言ふ能はざるべし。

四、結婚は戀愛の爲に行はる

然らば、結婚の目的は戀愛の滿足にあるか、然り先づ以て誤り無しと言ふべし、若し、金錢の爲めに、榮達の爲めに、君請ふ、吾と結婚せよと言はゞ、誰か快よく之に應諾する者ぞ、又、家庭を作らんが爲め、子孫を儲けんが爲め、等の事を言ふ者無きに非ずと雖も、然も戀愛を無視して婚姻する者は稀なるべし、吾は君を戀せず、されど家を成さん爲に、又は、子孫を儲けんが爲に、君と婚せんと言はゞ、之に快諾を與ふる者は無かるべし。

五、結婚道德と社會道德

されば世に『結婚道德』と稱する者ありとすれば、戀するが故に婚す、と言ふ以外に標準無かるべし、然れども、人生の事は唯だ結婚といふ一事實に止まるに非ず、人は結婚する以前に父母あり、兄弟あり、職務あり、公務あり、人の實際生活に重大なる影響を及ぼすべき結婚を爲すに當りては、固より是等の諸問題を考量し、利害得失を深慮するあるべし、蓋し是れ『結婚道德』と他の『社會道德』とをして衝突する無からしめんとすれば也、然れども、是れ唯だ實際問題として之を言ふのみ、現代の不完全なる社會制度習慣の下に於ける結婚に就て言ふのみ、吾等の理想よりすれば、單に戀するが故に婚すといふとを以て絶對的常理と致し度きなり、他に何等かの條件を要するが如きは決して自由の戀愛、自由の結婚、純潔の結合と稱するを得ざる也、吾等は此純潔無垢なる戀愛をして絶對的に自由ならしめ得る如き社會を希望して已まざる也。

例へば田中宮相の問題の如きも、世の人々多く之を以て結婚道德破壞の如く論ずると雖も、實は『結婚道德』を破りたるに非ずして、他の社會道德を破りたるには非ざるか、吾等今其事實を詳かにせざれば、之を論斷する能はざる也、然れども、彼の年齡の相異せるを以て背道德なりといふ如きは純理の上よりすれば甚だ理由無しと言ふべし、論者は餘命少なき宮相と春秋多き孝子とは到底偕老同穴の契りを完ふする能はざるが故に破倫なりとなすと雖ども、單に戀愛を以て結婚の條件とする吾等の理想よりすれば一日相會ふも、一年偕に棲むも、百年の未來を望み得るとも、其間に何等の差別あるべからざる也。

六、結論

要するに結婚は戀愛を以て唯一の條件とす、戀愛無き結婚といふ如きは形の上には事實として存する様なれども、無意義なる結婚なり、實は結婚と言ふ可らず、而して結婚の條件たる戀愛は各個人の趣味に從て相違あり、此の趣味をして絶對に自由ならしめんとするが即ち吾人の戀愛自由論なり、此戀愛の自由といふとを外にしては『結婚道德』といふもの無し、此の論議は聊か時機に遲れたるが如しと雖も、事少しく重大なれば、特に讀者の一考を促さんと欲する也。

血花

橋浦夏花

○血の花は呪の煙はく如しかの鐵窓にほろびし少女。

○新らしき子と古るき親あらそいて冷語まじえし壁白き家。

○古井あり木の葉しづめりそのあたりとむらふ如き虫の聲する。

○世の果てのほのほにやかれわが心青き一縷の煙とならば。

○紅き血と白き血とゆく血脈に女さゝやく白き聲して。

○霰ふる暗き大空かけゆきて木の葉の如くまえる鳩かな。

○暴風にたゝかいぞよいむ野の森の裂け散る音の悲しくきこゆる。

○あゝ冬は日も夜も凍るかゝる時戀をやしなふ若き人みよ。

○暗き空ふるへて見ゆる冬の星今警鐘は獄窓にひゞく。

○冬の星凍れる空をながめつゝ獄窓による若き人かな。

○バスチエルに砲煙のぼる爆聲は天地うごかす見よ彼の炎を。

○手にあまるピストル抱き生の日をにえにそなへし北の少女よ。

○戀もなきわが世の寒さ冬空に星のふるうを[illegible]ひたゝづむ。

女子大に讀むべく男子盛んに讀ざる可からず（本號に限り八頁）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

亡母の紀念

ひで子

(一)

〇母みまかり給ひし時には、彼此と取り來る俗用に取り紛れて、唯だ悲しき中にも、かくてやはあるべきと自ら心を引立て居りけるが、此頃やうやう心靜まりてありし昔を獨り思ひ出づるに、皆な亡き母の悲しき紀念に非ざるは無し。淋しく愁はしきが中に、其を二つ三つ記すべし。

(二)

〇思ひ起す。吾が七八歲の時、切り髮して男裝せる母上の手に引かれて、吾が家より七八丁を隔つる女子教訓所に通學するや、其切り髮に羽織袴といふ異樣なる粉裝に路行く人珍らしくおかしがりて、中には指さして、嘲笑するものさへありき、吾はそれが非常に恥かしくて、母上に髮を蓄へ丸髷を結はるゝ樣に請ひし事さへありき、されど母上の深き苦衷はこゝに秘みありしと今に至りて初めて察せられ、涙の種となりぬる。もし、母上は貧乏なる家庭に小供四人の世話をなしつゝ、尙生計のために、彼の女子教訓所に教鞭を執り歸家せば亦家政に子弟を教養し、夜は翌日の教訓所にての課業の準備をなし寸時の暇あれば子供の着物のほころびやら、洗濯やら、いつも深更まで少しも身心を安むる暇なければ其結髮の如き婦人唯一のたしなみならんも、母上はそれさへ思ふに任せざりしなり。

〇母上は他の嘲笑を少しも意に介せざりし如く、又た吾が請ひをも聞かれざりしが漸次、馴るゝに從ひ誰も怪しむものもなきに至りて自分も安心せしてそ、おかしけれ斯る髮結ふ暇さへなき身にしあれど、尙ほ家計のたしにもと、父上と共に元結ひを撚り玉ひしとありき更に又そを儲めば裾をからげて、茶園を耕し、大根や葱や水菜なぞを植へて、野菜物は大抵其茶園より執り、八百屋より買ふ事なかりしが如し當時父上は六七里斗り離る兒嶋郡に在りし警察署の巡査を拜命し玉ひし事あり、我家は多く無人なりしが、留守番はいつも姉澤子君にてありしと覺ゆ。

(三)

〇吾等兄弟姉妹は斯の如き母の辛勞慈育に依りて成人したり、四人兄弟の內、特に一層教育に心を注がれしは吾にして、女たりとて將來は無學で通るべきものに非ず出來得る限り學問すべしとは常に母上の言ひ玉ひし處なりき、吾に學問をさすといふ事につきては、父母の間に數々意見の衝突ありしも、母上は常に父上を諫めて、漢學を薇山先生に(西薇山先生の事)學ばしめぬ、讀書の進むに從ひ吾は詩經を讀むに至りぬ、此に至りて亦父母の間に爭論起り、終に詩經の講習を廢するに至りしが、其當時御本仲の吾は何事を辨せず今日に至りて考ふれば、自然主義的の文字多かりし故なるべし、父上の言が世の人の自然主義を難すると相似たりしを思ひて、おかしくも感ぜらる

〇幼くて吾が母上は讀書に趣味を持ち玉ひしゆへ、尙も文字の羅列せるものならば利害如何に係はらず、書物を手にさへすれば、喜び玉ふ樣見えたりき、されば、小供心に遊びたき一杯なるも、讀書せよ土曜日には演劇に遣らんと云はるゝのが嬉しさに心は空にて意味も解せずに暗誦的に大聲を舉て讀書するを常とせり、吾が幼少より演劇好きなりしは皆々聽きし事にて薇山先生の奧さんは、あなたは演劇を觀て、分るのかと問ひ玉ふ吾はそれに答へて、其俳優の科、白、如何に注意したる事なく只々各師の劇の中に大なる教訓ある事を覺え且つ是に多大の趣味を感ずと云ひしに、奧さんも小供に似ざる事をいふもいかなと驚嘆せられ、さあらんには、あなたの觀劇は非常に有益なり、今吾にて云ふ說教を聞くが如し、さればてそ、おつかさんが一週間毎に演劇におやりなさる譯ですねと云はれしとありき。貧苦の中にて、週一度の觀劇は隨分贅澤な樣なれど、昔の芝居の事なれば、辨當持ちにて行けば木戸錢の二十錢位にて半日の興を貪り得、翌日はそこに誘はれて一層の喜悅心を養ひ得たりし也。

(四)

〇母上の女子教訓所を辭して、家塾を設けられしや當時藝娼妓に女子としての修養なかるべからずと志ざして『女紅場』なるものを設け此處に聞く市內の藝娼妓を網羅して通學せしめ、母上は其校長たる教訓たる資格を以て市內のあらゆる美人を一堂に集め、此人々にも心からなる眞心を以て吾子の如く教育せられければ皆先生く〱と母の如くに慕ひぬ、殊に早く父母に離れし年若き藝妓は數々慕ひ來りて吾が家庭をしたる事あるを覺ゆ、されば母上は屢、友人に戲れて言ひ玉はく私ほど美人にして斯く豪遊を極むるものはなかるべし、春秋二季には此女紅場に於て生徒の運動會あり此日は岡山市中の藝娼妓悉く一堂の下に集り各々得意の遊藝を餘念なくさしめ平素の煩悶を忘するにあれば各々自由の身となり誰に遠慮なく遊樂に耽る樣は富豪が一夜に一萬金を投ぜしとて、斯かる面白き遊びは出來ざるべしと、是れ明治十五六年の頃なりき。

(五)

〇又岡山にては疾くより自由民權論を唱へんにして、母上の如きは一種深窮の學問の勤めに『西洋事情』を愛讀せられて、專制政治及び階級思想の如何斗りか良民を苦せしかを說き、又此時より孟子は民權家なり孟子の講義を聽くべしと吾々にも勸め玉ひしは、かゝる有樣なりければ吾は自然人生觀食の問題につきて研究する樣になり、終には人間同士論なぞをかつぎ出して、公開演說をさへ試むるに至りぬ。當時何ぞ東西も分らぬ身にして其抱負の大なりしこと吾一人にして專制政治を轉覆し立憲政治を樹立せんなぞと意氣込みし事の今更おかしく[illegible]し。

〇斯かる際なりければ吾が漸く長じて所謂生意氣盛りになり、研智學校にて助教ばれたり、吾が家塾にては、花形役者として頻りに演說討論會を開きて人々に時事を談ずる中心となり青年男女の嗜好に投じて、公開の席上に出席し自由民權論を主張しければ縣廳の嫉視甚だしく、兄上は勤務せし小學教師を免ぜられ、次いで家塾も評議の次第有之と下に閉校を命ぜられぬ。

〇されば吾が憤慨制せん樣なく、蹶然起つて東都に奔らんと志ざし、度は此の希望を母上に告げて許しを請はんと思ひしも若し成らざる時は累を母上にも及ぼす而已と顧慮し、遂に告げずして走らんものと覺悟はせしが、どこか色にも顯はれけん、或る祭の節母上は人々に後れて吾が側に來られお前は今度の事を立腹し出奔の意あるに非ずや若し斯かる希望あらば私のみには告げよとのたまひしも、吾は何處までも秘して、堅く其事なしと答へて安心せしめぬ其翌日友人の家に至ると稱して終に奔りければ、家人は母上を責めて、之を母上の罪に歸し、爲めに家內に風波を生ぜしめしが後に至りて吾が家出も主義目的のためならば如何に罵詈せられしとて意に介せず、身を大切に其目的を達せよ、吾れは其成功を祈るなりと懇切に諭し慰め玉ひ自分は總ての侮辱を一身に引き受け玉ひたり、あゝ母君は斯くまでに我を慈しみ玉へるなり然るに吾は此慈愛、御言葉に適ひたる行動を少しにても實踐せしか、今に至りて如何に悔ゆるも何くの甲斐かあらん吾は此慈愛なる母上を今は見る能はざるなり

(六)

〇吾が幼少の貧しき家庭にありて、斯かる身分不相當の教育を授け玉ひしは如何ばかり御苦心の事なりしか、此の御鴻恩を思はずして我儘三昧に日を送り通常婦人の爲すべき義務をさへ盡さず、且つや此淋しき家庭に何の御慰めもなく一只々おちうちで長火鉢の前に自分自由に茶を啜りたきとの御言葉に甘へて、御同居せしものゝ吾は生計の苦闘に每日留守勝なり一日御好みの和歌俳句の御話する暇さへなかりしの身にて終に物質上にも精神上にも御安心を與へず、依然として元の木阿彌のまゝ永の御別せし事、返すく〱も恨めしあゝ吾れ如何なれば、斯く不孝不慈の生活を送りて覺めざりしか。されど慈愛深き母上は、此の不孝なる子を最とゞ御心に掛けさせられ、御身の終焉を吾が茅屋にて遂げ玉ひぬ妾如き不孝の子も母上を追懷すれば涙にて筆さへ躊躇として運び難し、今は唯だ一言を申す 縱令母上の遺骸は此處に在さずとも吾は母上の慈悲深き御精神を心に記して益々我が罪世の惡と戰ふべしと、

〇私も母を亡くしました

△[illegible]氏夫人

御母堂樣の紀念號、いひ知らぬ悲しみを以つて拜見いたしました。然し御母堂樣は幸福でゐります、死して斯く多くの人々から追悼され、且つこの紀念號を通して御母堂樣のお心が世に知れ渡つたからでゐります私も昨秋母を亡くしました。が母は谷奧に咲いた蘭のやうなものでゐりましたツイに名なくして死んで行つて仕まいました、私はこの事を切に深く悲しみます。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

行路の難

みさを

人生五十年、思へば波上に漂ふ浮草だ。今日は淀みに停留したかと思へば明日は、滔々たる流れに下り、遂に大海に出る、青海原に出づれば果しない大曠間で所謂物事を洗面に處理せねば滅亡の悲境に陷る、余も又その浮草として今日は此所に居るものゝ明日は何所の空に彷徨ふやら「パン」の爲に知らぬ他郷に追ひ遣らるゝ身の上、

思ひ出づれば社會に生を享けて以來、父の膝に攀ぢ母の懐に眠りし昔は知らず軈て朧ろげにも物ごゝろ辨へて行末をやせん角やせんと思ふ程となれば宛ながら小春野の眺めをものしたる「パノラマ」に彷徨ふが如く此所に振りよき枝あり彼所に深よき花ありては香ひ深けれど、そは趣きすぐれたれどなど千々に心を迷ふ何れをそれと極めかねつ、されど邪もなければ欲もなく心に屈托なければ身に苦勞もなし靜けき風は芳香を送りて無垢の大望を煽りつ長閑けき晩の影は彩を添へて罪なき希望を温めぬ、蹉跌、艱難、失望なんどと夢にも知らず人生は平坦なるものとのみ信じ世路に荊曲あるを疑はず實に太平安樂の時代は早や過去りぬ。

今や樂しき光景は空しく綺空言となりぬ曾て手の届きけん枝も花もそれに遠く幽かになり行きて跡には四顧渺茫たる海原に漂ふ體軀のみを殘しぬ而も海原に出るまでの困難は並大體でない殊に身は職務の爲に、束縛さるゝに至つては尚更らのことで萬事我が意ばかりを通す譯に行かず時にはお義の塵をも排はねばならぬ提灯をも持ねばならず或は屁理屈にも默せねばならぬこれも只に「パン」の爲の屈辱かと思へば實に殘念な次第なり。

宇宙は空大で世界は又廣い、五尺の軀、墳墓の地は到る處にあり青山又我を迎へて、るかと思へば伸縮の域に跼蹐する只哀むべきは自由の天地に生きながら或る籠に入れられ繋がるゝ人達だ、生活の方法こそ斯くて不平と不滿に窮々として、あつたら貴重な五十年を怨恨の中に過すとは人間は「パン」の爲に生活するのだ思へば生活せんが爲に「パン」を求むるのか人生の意義も不可解になつて煩悶して居るとは云ふ余も又一瀉千里の潮流に驅られて荒寥無人の悲境に捨てらるゝか、さては順風帆を胎ませて沃艶富肥の樂土に遊びてんやアゝ覺束なきは今の憂世

犬王錄

長犬王

春の花も大方散つて、世は野と山と緑の裝を整ふたやうに青々たる頃、とある所で一人の赤子が呱々の聲を擧げました、其の聲は大きく勇ましふムいました。すると何處やら余所の忌やらしい伯父さんが來て、其麼な大きな聲して泣いちやいかん。默れ！それに其麼な聲して泣いちや世間の邪魔になる、殺して仕まふぞ！といふて、よもやと思ひましたのに、本當に殺して仕舞いました。　太い、眼鏡を掛けた、深刻な顏の若い男と、これも眼鏡は掛てゐたが、亞米利加の土人のやうに赭黒い顏の、而し矢張り、否より若い男とは、其の赤子を守つてゐたのでしたが、餘所の伯父さんがあんまりな馬鹿な、苛酷な、没分暁漢なものですから、義憤は心頭を突いて燃えたのでしたが唯だ呵々と笑つて相手にはならず、彼れの爲すが儘に任かせて置きました、右の若い者達の友人の、磊落のやうでもあり、小心なやうでもある年少詩人や、邪氣のない、善く人の爲に盡くす青年農夫や、學術の深い、篆の達者な法學生や、田舍の兄いよりも開け放しな、而も不羈ほしい醫學生や、眼鏡掛けた貴公子然たる、青年や、丈けのひよろ〳〵と高い、肺病患者の男やは皆殘念がりまして、ひどい事てきやがつたなあといつてゐました。

然し時が經つて、世は焚けるやうに暑い夏の最中、同じ所でまた、以前と同じやうな赤子が生まれました。然も其の泣き聲は以前より遥に大きく、一層勇ましく、且猛烈でありましたが、今度は無茶な事をされないやうに、豫じめ柵を以つて家の周圍を圍い、そして赤子を護つてゐました、前の眉の太い男は、矢張り搖籃の側にゐましたが亞米利加土人は最うゐませんでした。其代はり何處からか來たか、優しい顏してゐながら、然も獰猛だといふ評判のある男がゐました。先に述べた五六の友人達も、皆陰乍らこの二人に力を添えてゐました。余所の憎たらしい伯父さんは以前のやうに矢張り矢釜しいといつて來ました。其麼な騷々しい赤ン坊がゐては、近所隣りは勿論世間が擾亂して仕舞ふ、今度は無茶に殺して仕舞ふとはいはないが、泣くな〳〵。泣いちやいかん。然し能く考へて見ると、實は其の泣く赤ン坊より、第一其麼な赤坊を擁護してる奴が惡いんだ。擁護する奴があるから、其麼な赤ン坊が引き續いて出來るんだ。といつて、今度は擁護者の頭領、眉の太い男を、何處かへ連れて行つて仕舞いました。

其の後獰猛な男は、一人で赤子を撫育してゐました。然しそろ〳〵涼風が立つて、世は秋とならうといふのに、着せる着物も充分ないし、第一乳料だになくなりそうだといふ心配か、起つて來ました。且つ獰猛な男自身も、守りしてゐては食へなくなつて仕舞ひました。流石獰猛な男も、これには閉口しそうになりました。然し赤子は、其麼な事にはめげもせず、頓着もせず、矢張大きな四度目の聲を擧げました。獰猛な男も成る可く上手に、余所の伯父さんに聞こえないやうに泣け、といつて聞かしたのだそうですが、まだ生まれて僅かな聞き分けなき赤子は、持ち前の遠慮會釋ない聲を擧げるより外かつたのでせう。さあそうした所が、余所の伯父さん驚くまい事か、取るものも取り敢ず飛んで來て、撲らいつても分からない奴だ。今度の聲程大きい聲はない、其麼な泣き聲しちや天地が崩れて什舞ふ。といつて、赤子を何處へやら連れてつて了ひました、それと共に守り役の例の獰猛男も、連れて行かれやうとしましたがいや〳〵行かないといふ。いややるといふ、すつたもんだの騷ぎがありましたが、時世が時世なので、ツイ連れて行かれて仕舞いました。

以上の騷ぎの最中、眉の太い男はひよつくら顏を顯はしましたつた。が形勢斯くの如しなんで、最う如何ん共致し方なく、留守中の赤子の無殘な死を、悲しむより外ありませんでした。

本統に氣の毒に堪えませんのは、眉の太い男の留守中、僕を守り役の手傳ひしやうといつた貴公子の青年です、實際其の局に當たりもせんのに暫らく囚らはれて行つて居ました。其の場所は寒い所だつたといふ事でしたから、嘸辛義した事だらうと推察してゐます。

嗚呼薄命の赤子！眉の太い男、獰猛な男を始め、其の他の友人達まで、此の赤子のために、どの位心を痛め、金を掛け、骨を折つたか知れません、然し時に利がなくつて虐殺されて仕舞ひ今は唯だ悲しい、思ひ出の一トツとなつて了いました然し一ト粒の麥が地に落ちて死なゝかつたら、決して多くの實は結ばないのであります。此の赤子の種から芽が吹き、花が咲き將來多くの實の結んだ時に、然り嗚呼其の時は一入らない世話燒きの余所の伯父さんも始末出來ないで困り果てませう。噫愉快!!

（二月二十一日）

故山

（默舟）

いや千古に　綠りぞ深き
甘山の　奇峰は高く
谷清く　我が半生を
回顧せば　二十と五年
流浪の　恥ぢと汚れに
朽ちし身も　今復活の
蘇さす　曙光微かに
耀さな
オー故郷の　山よ水
永久に光榮あれ。　いざさらば
又の逢ふ瀬は　希くば
此我ならず　嚴に
笞烈しく　鞭打てよ

●去月廿一日谷中村を訪ふて讀める歌　旭山生

○冬來れば、新嫁裝ひ、夏來れば、毒水溢る谷中村　春花咲かず　秋實りせず

○沃野千里　空しく荒れて　水鳥の　故國吊ふ聲ぞ淋しき

○花咲かず　丘陵實らぬ　野家にも　唯だ絶間なく　税迫きぬ

○地を堀りて　太古穴居の　谷中村　盜み人無く　治め人無く

○貴人は　知らず　乙女が　軒端にて　臼輓く歌の　聲ゆかしきを

○谷中村　枯野荒野は　渺茫々　人は寥々　風は蕭々

○西伯利亞の　氷の山を　掠め來し　颶吹き荒さむ　谷中の村

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

平民音樂

林近生

一、女子と音樂思想

門松は冥土の旅の一里塚、めでともないし樂しくもない、がさて世俗が浮れ調子で、空騷ぎを行ると、何程悟り貫いたる哲人だとて寒巌枯木でも無ければ然更澄し込だと云ふわけにも行かぬ、で、がらにも無いとだが、僕も一つ音樂談を書いて見たいと思ふ、勿論貴族的大音樂の事は些と僕等と御門が違ふ。

先づ三ケ日、長くつて七日中迄では何處の家だとて、酒の香ひと三絃の音の洩れぬ所は有るまいが、然りとて、酒の味は分るかも知れぬが、眞に三絃の音を聞き分ける人否聞き得る耳を持つてる人は少い樣だ。

或は寺小屋が悲調を帶びてゐる、千代萩が哀れを催してゐる、大閤記が愉快だそれで三味線を耳にする、それ以上何の感想をも腦裏に描かないのが普通人、多く女子の通性である、勿論音樂の趣味を解し得るには充分なる音樂思想の裡に養成されねばなるまい、僕の知人に音樂の講習所を設けてゐる婦人があるが、却々の愛犬家であつて我子以上に犬を愛する、手を傷ける、袖を破く…それでも決して愛は依然として變らぬは勿論却つて痛く喜悅の念に打たれてゐる、處が此ジヨンと呼ぶ犬が又不思議な程妙に育てられた犬で、藝當十八番何でも出來るが、就中て洋琴を弾く事が巧みで、彈奏の眞似をするのが非常に面白い、煎餅一枚か最中一個で藝をするのだ、何と面白いではないか。

丁度現今の女子が音樂に對する態度が此のジヨンに好く似てゐる、眞似は好くするよく吠つる、マタ此犬と同じく、眞の趣味を解してゐない、只一個或は數個の外界より來れる刺激に由つて、遇然發作し來れる動作に過ぎないのである。

で僕は僅少なる時間を以て、極めて平民的に女子諸君が此音樂思想を養成し得る一方策を述べたいと思ふのである。

二、和洋の別

音樂と一概に云ふも、區分すれば和洋の別が生ずる、オルガン、ピアノ、バイオリン、マンドリン等幾多の樂器があるし、又和樂には琴曲、三絃、尺八、等其他數種の美しい、音調を生む樂器があるのは、諸姉の方が充分御承知でもあらふが、さて何れが佳良で、何れが拙劣であるかと云ふ點に至つては、一朝一夕に批判し得る限りではない。

先づ和樂の下劣を喋々する博識家に一言申述て見たい。

僕曾つて秋の夜半、北斗七星煌々として光を競ひ、名月皎々として大空に懸れるの頃であつて、孤獨徒然の余、不圖不忍池畔を散歩した、折々一羽二羽の水禽が、バタ〳〵と沫を、飛ばして翔け昇る羽響きの外池畔何の音も聞えない折らも幽かに靜寂を破つて聞ゆるのは、げに名狀し難い、尺八の妙なる音である、一調高く、一調低く、遠く音を聞く僕は、宛然酔へるが如く心氣淸快身は憂世を脱れて、暫時天堂に遊べるにやと疑ふ許であつた、次第に募る思慕の念に驅られ、思はず其音の主を求むれば、之れなん一個商店の小僧君であつた、何と奧床しいとは思はざるや

又曾て、僕が老後の供養にもやと教會へ行く途次、彌生町の裏路に取つて行くと、不破の關屋のそれにも勝る程、破れ過ぎたる杉垣の間より、思ひ絶えたる琴の音が聞える、十九か二十計の年若い乙女が、何やら、唱ふてゐる、聲も好いが其彈奏も又却々巧みである、神韻自ら籠つて、アポロの神に彈奏にやと行き通ふ人をして思はず知らず、賞め稱へしめた、實に心地の好い、味はへば味ふ程其眞味が胸に染みて、予は仲々に思ひ切つて歩を轉じ得なかつた

三絃でも又然りで松源邊でよくヂャン、、カラ〳〵行つてゐるのは別として、一番定まつた曲を彈くあらば、雨夜時に行すむ門附に增したる哀感を生み、雅やかなる料理店などでは到底も知られぬ喜悅の極みを味ふ事が出來る、が概して三絃を正しく彈するには哀調の多い方が良い感想を與へる、

然し乍ら僕は決して洋樂を排斥する偏極論者には非ず、否寧ろ洋樂の熱心なる好愛者たる事を知つて貰ひたいのだ

音樂學校では先づ手始めにピアノを打たせる、で各自專攻を選んで、オルガンなりバイオリンなりを特習するので、今は非常にバイオリンとピアノが流行る相である

で僕は此期逸す可べきに非ずと思つたので、今春から大に音樂思想を求むると同時に普く同好の仁に通せしめたい思つてゐる

で仲には極力洋樂を排して和樂を鼓吹してゐる先生も國粹だとか、國華だとか云つてゐるが、それは、十九世紀時代の遺物で吾人の歯牙に掛けるに及ばぬ頑骨者と知るべしである。

三、音樂思想の養成と其素地

路傍に佇た子守は聲高らかに、七五調子を亂さず、子守歌を唱つてゐる、少し年長の小女は何時となく流行する歌を記憶して唱つてゐる、僕の知人の娘で年が十二であるが、却々唱歌が好きである、表を書生が口笛を吹いて行くと「あれは何々の歌だ」と云つて直く調子を合せて歌つてゐる、で或時突然僕が「離れ小島」を唱つてゐると、暫時熟聽してゐたがやがて唱つて見やうと云つて「一見渡す限り」から流暢に巧く唱つた、でそれのみか更に全部を暗誦する、そして母さん驚かすと云つた。

凡て女子は、小年の折から、無限の素地を保つてをるので、巧みに之を發展させたならば必ず趣味を解する婦人が出來るのは確だ

母の死

ばんさん

⦿去年十一月の中旬、木枯らしが紅葉の山を襲ふて、空に木の葉を片々と吹き散らす頃予は母を失ふた。

⦿母の病は腦出血、俗に卒中といふのだつた、からして僅か六日間しか病まないで亡くなつて仕舞つた。「血族に中風になつたものが多いが、什麼かアノ病氣には罹りたくない」と、生前屢々物語られた程、苦にし、厭ふて居られた、その中風、而も急劇な卒中といふ奴で、遂に生命を取られ給ひし事を、予は切に痛ましく悲しく思つてる。

⦿母行年六十一歳、未だ甚だ老いたといふ歳でもない。殊に豫想しなかつた突然な病氣なんで、今茲で死なれては、三十余年養育の洪恩に報ゆる事も出來ず何卒か生かして置きたいものだ。それに自分は余りに我がまゝに慣れて、不孝の子だつたから、これから精意孝養を盡くさうと、只管思念したのだつたが、遂に如何んする事が出來なかつた。

⦿母は誠に溫い母であつた、同情の深い涙脆い、美しい性情の人であつた。中流階級の農家の主婦であつたが、其の子等のために生涯紡績を續ふて、疎食に滿足して、粒々辛苦働いてくれた、其の犧牲の心を偲ふて、予は今泣かずには居られぬ。

⦿然るに予は遂に、告白せねばならぬ事がある。懺悔せねばならぬ事がある、何んぞや？予は慈愛に富める、鴻恩ある母の、痛ましく病み臥す枕邊に、涙作ら看護しながらも、どうせ中風なんぞで、元のやうな體になれない者とすれば、假令年生たとて人生の味はひの作られやうも無い　いつそ寧亡くなつて仕舞つた方が母の爲に……といふ大それた心を起したといふ事である

⦿そは何故よしとする、長兄姉患に罹れて以來十余年、常に病者二人ブロ〳〵してゐないといふ事のない我家は、月に年に財政の衰頽を來たし、この上更に半死半生の如き人を加へて、今後數年介抱するといふ事は、經濟的に到底不可能の事であるこの生活難といふ考への。暗黒の中に燐光の如く閃く事を、予は母の最后の病床に侍しつゝも禁じ得なかつたのである。

⦿噫予盾！母は戀しい。懐かしい。百年も千年も離かれたくない、什麼しても死なせたくない、世の中で最も懐いこの母子の親情を、長く味はひたい。といふ感慨らから、が迚も養い得ない。といふ懊悶しい、憂ひと恐れとの心が、蛇のやうに頭を擡げて來る。予はこの予盾に泣かずには居られなかつた。予はこの予盾を憤らずには居られなかつた。

⦿到底この予盾の根絶せざる限り、眞の人情は遂行されない。甚だしきに至つては子を捨てる親のあるのも、親を省みない子のあるのも、所詮この予盾の跋扈してるが爲だ。人誰れか人情の無からう。その人情を遂はないのを得ないのも、皆この予盾橫行の爲ではないか。呪ふ可き予盾！

⦿然り呪ふ可き矛盾は！予は母との長き訣れの席に於いて、切實にこの矛盾を感じ什麼しても之を除却せねばならぬ事を思つた

⦿一ト度罪惡を告白し、懺悔しても、この予盾の存在する限り、何時二タ度三度、否幾度でもこれを繰り返さねばならぬ。噫推しく悲しく痛ましく、將たまた厭ふ可く憎む可き社會ではないか(十二月十一日稿)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

空裡光　(六)

南無頁南無十讀人

社會と個人

『二人ともに臥れば温暖なり、一人なれば何で温暖ならんや』―傳道の書四の十一

『人は社會的動物にして其天性として自然に社會を形成するものなり』　アリストテレース

(一)

「二人ともに寢れば温煖なり」とは何人も實驗する所の事實である。「此二人」の温煖は、實に社會の生命である。此温煖なければ社會は直に死滅に歸するであらう。換言すれば、二人が一人に勝りて温煖なるは、是れ實に人々相結合するが自然の運命なることを示すものである。古代希臘の大哲アリストテレースは、人間は先づ自然に家族をなし、次で村落を成し、遂に國家を形成するに至る、蓋し人間は社會的動物にして其天性として自然に社會を成すものなり」と言ふて居るが、今日の多くの學者も尚ほ之を以て不動の眞理とし　珍重して居る樣である。

(二)

然るに、社會と個人との關係に就ては二種の意見が古くから行はれて居る。社會主義と個人主義、即ち是である。社會主義の極端なる形式は個人發意の無視に在る。人は境遇の産物なり、個人に先天的能力無し、人は一社會孤立の人は完全なる人に非ず、人は「社會人」としてのみ存立することを得、人の天性は共同團體に於てのみ維持せらる、孤立は有限にして拘束なり、共同は無限にして自由なり、故に人は絕對に社會に服從せざる可らずと言ふにある。

個人主義の極端なる形式は、一切の外來的拘束を脫して唯一に我性を發揮せんとするに在る。理想と言ひが如きものは吾人心裡の假造物にして、非實在なる觀念なり我性はすべての造物主なり、汝自身を自由にせよ、何等の義務をも認めざれ、余の權利は何人も之を余に附與する能はざる所、神、理性も、自然も、國家も、其他如何なる形式を以てするも皆其能力無く、之が唯一の裁判者は我なり、と言ふに在る。

前なる社會主義は之を强制的共産主義と稱し、後なる個人主義は之を個人的無政府主義と稱する。然るに此兩極の中間に又た二派の主義がある、一つは社會民主々義であつて、他は無政府共産主義である。社會民主々義は强制的社會權力を是認しながら其權力を構成するに就て極めて自由なる、平等なる方法を設けやうとするのである、之に反して無政府共産主義は、人の社會的生活に赴くは是れ自然の歸趣なれば、共産制を樹立すべきは勿論なれど、然も强制的權力を用ゐるの必要なし、須らく各個人の發意によりて自由なる共産社會を設くるに如かずと言ふに在る。

前掲の極端なる社會主義と、極端なる個人主義とは、到底相容るべきもので無い。其根本原理即ち人生觀其ものに於て、又た個々なる實際的題目に於て、到底多くの衝突を免れないのである。乍併少しく精密なる考察を加ふる時は、兩者の相衝突する點は、兩者各自に於て矛盾を存する點であることが分る。即ち社會主義者が人の「天性は唯だ團體に依て維持せらると言ひながら、個人發意の價値を認めないのは矛盾である、既に共同團體に依て、天性が維持せらる、ものとすれば共同は『天性』に適合したるものである。果して然らば個人の天性たる發意と共同生活とは決して矛盾すべきもので無い。次ぎに個人主義者が何等の義務をも否認しながら、猶ほ組合生活を設けるは矛盾と言はざるを得ない。尤も其組合は自我の用具のみ、自我其屈する所となるに非ず之を屈せしめて己の用に供するのみと言ひたれど、若し我にして之を屈せしめば、他の組合員は即ち屈服者となるであらう。若し又兩者の利益相一致するものとすれば結局社會主義と同一の論に歸するのである。即ち共同生活は自然の道理なりとする社會主義と一致するのである。

要するに社會主義と個人主義との所論に衝突點ありとすれば、其點は各自に於て既に自家撞着の存する所で、從て眞理に非ざる點なりと言はねばならぬ。

(三)

予は、社會的協同と個人的自治とは人生々活の缺くべからざる兩方面であると思ふ。此兩者は一の所を兩面より見たるものに過ぎぬと思ふ。前段各章に試みた人生の觀察法は此にも應用する事が出來る。即ち人生々活を客觀的に觀る事と主觀的に觀ることである。人生々活の一面を客觀する時は、人は決して獨立のもので無い。個人生存の條件は社會である。社會無ければ個人無く、個人は社會の一分子として一切他力の生活を爲すに過ぎない。生命は社會其ものにありて個人は其一細胞に過ぎぬ、個人は社會に對して無力である、世の厭世思想は此個人無力觀より現世の暗黑を見た結果である。然るに一轉して自己を主觀する時、吾等は外來の如何なるものにも屈せざる自我を持つて居る、自我の自發能力を有し自發的活動を行つて居る、約言すれば、獨立の生命を持て居る。此自我觀よりして現世の暗黑を見た結果は即ち革命思想の勃興である。吾等は實に此の如く一見相調和せざる如き兩面を具へたる人間である。トルストイは人生の根本に此大矛盾あることを說き、而して自我拋棄の教訓を宣傳する事に努められた。而して「愛」とは犧牲的勤勞の意に外ならぬ事を說かれた。

併し、此兩面の關係は決して不調和のもので無くて寧ろ相互に缺く可らざるものである。試みに看よ、自我といふ獨立の自覺ありて始めて茲に自治といふ作用が起る、自我に自治の能力あればこそ、協同生活の實も擧がるのである協同生活の實擧がりて此に始めて社會は成立するのである。但し現下實際の狀態として個人と社會との間に衝突があるのは、最も著しき事實であるが、是れは現代社會の制度、習慣の惡いからである。而して此の如き制度、習慣の出來たのは、人民が「物慾の陰」に蔽れたからである。

(四)

さて右の說話は、單に根本原則に關する理論上の解釋に過ぎない。其細目の理論並に其理想の實現順序に就ては思想の傾向の差異に從て、學者の說く處、區々として不同である。例へばカル、マルクス等の社會民主々義は産業及政權の統一を主張し、クロポトキン等の無政府共産主義では産業及び政權の分置を唱導して居る。然も此の如き兩者の相違は思想の系統上自然に生ずべき傾向を存するのである。蓋し如何なる場合に於ても戰爭には統一制度を必要とし平和には自治制度を便利とするので、夫の人生進化の動的觀察に基きて階級戰爭論を唱導するに至つたマルクスは自然に統一主義に傾き、人生理想の靜的觀察に基いて相互扶助論を主張するに至つたクロポトキンは自然又自治主義に傾いたのである。乍併クロポトキンが絕對的に自由協同の理を唱導しつ、尚ほ暴力的革命を賛同するのは少しく合點が行かない。抑も自由協同は平和の産物であつて、暴力的革命には應合し難いと思ふ。トルストイも唱導して居る事であるが、暴力的爭闘は權力制度の唯一原因である、暴力的爭闘は權力的統一とは到底離る可らざる干係を持つて居る。若し自由の協同を以て社會の大革命が出來る程に人心が進歩したなら、其時は既に今日の所謂社會革命を要しないのである。

さてマルクスが階級戰爭論を主張して權力統一主義を唱導したのは眞に正當であらうが、統治的中央政權を樹立して尚ほ民主的自由郷を實現し得るものとしたのは甚だ敬服が出來ない。最もマルクスの意にして來るべき革命の翌日、即ち單に土地資本其他の生産機關を社會の公有に歸せし當時の制度として中央統治權を是認したものとすれば強ち不可とすべきでは無いが、之を以て直ちに自由平等の社會を完成し得るものとすれば大なる妄想と言はねばならぬ。此點に於てはクルポトキンが『私有財産を廢止せる社會は勢ひ共産的無政府主義の方針を以て自ら組織せらるべく、無政府は共産主義を誘致し、共産主義は亦無政府を誘致す』と言はれたのは寧ろ正當と思ふ。但しクロポトキンの理想が現在の革命運動に依て直ちに實現するの困難なるべきは前條の如くである。

此に於て乎、別に平和的又は精神的無政府主義が起つて來た。トルストイの如き是れである。彼は暴力の革命を非認して居る暴力の革命によりて平和なる共産生活を實現しやうと謂ふのは妄想だと言ふて居る。單に制度の改革、及び思想の改革のみに依て、其改革の目的を達し得ると思ふは誤謬にして、更に進んで精神的改革をせねばならぬ。否な精神的改革のみ獨り有要であると言ふて居る。併し、此精神主義の議論は恰も汽罐車あれば軌道を用ゐずして列車を進行せしむることが出來ると言ふ樣な言ひ分である。

(五)

此精神的無政府主義のトルストイ翁や、前掲の個人的無政府主義のスチルネルが、共に理想の滿足を將來に望まんとするを排して之を脚下に求めよと唱へたのは甚だ面白い。「未來」は永遠に到來せぬものである。個人の平安は常に個人の脚下に在る。但し其脚下に於ける平安は人生の革命と兩立すべからざるものなるや否やは自ら別問題で、予は之を次章に於て述やうと思ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

喜劇 伯父か甥か(一)

シルレル作
神崎沈鐘譯

登場人物

陸軍大佐　富士高綱
大佐夫人　英子
大佐の姪　菊江
大尉(大佐の甥)　富士武夫
大尉の妹(大佐の姪)　春子
中尉(菊江の許嫁)　筑関要
少尉(武夫の友人)　筑波三郎
武夫の馬丁　上野森太
公證人　向島辨吉
富民　二人
馭者　一人
大佐家令　畠田花助
大佐の下僕　三人

序幕

第一場

筑波三郎足早に登場し、誰か近處に居りはせぬかと四方を見回しつゝ、蠟燭の點いて居るテーブルに凭れて端書を讀む。

鳥渡申上まゐらせ候、突然のことにて定めて御迷惑とは存じ候へども、是非お目もじの上、山々お話申上たき事有之、甚だ押付けがましき次第には候へども、今晩六時頃、富士大佐の庭園の涼亭までお出下されまじくや、日常も開け放ちたる潜戸よりお入り下されば、決して他人に見付かる恐れは更に無之候、先づは不取敢匆々可祝。

筑波。誰から來んだらう、……署名も無い……變なこともあるものだ。ヒヨツトしたら此れは、ハイカラの廂髪が僕に會たいと言ふのぢやないか……だと愈々以て面白いぞ萬歳の百遍も……オヤ……誰か此方へ來るぞ、何だか二人のやうだ……」

第二場

富士武夫、上野森太、筑波三郎

武夫「外套を脱で森太へ渡しつゝ」「ヤア、筑波君……今晩は」

筑波「ヤア……何だ富士君ぢやないか、何しに此處に來んだ。奇妙な扮裝をしてるね其の鬘は何の洒落だ。して君の着てる服は君の聯隊のぢやないぢやないか」

武夫「マア、さう云はないで靜にして呉れ給へ、……實はね、僕の聯隊の中佐と喧嘩をやらかして、到頭彼奴を半殺しにしちまつたんだ、で東京へ逃れようと思ふて、人目を忍んでやつて來た。服も僕のでは直ぐ見付かるから、伯父のを着、君も知つてゐる通り、伯父とは言葉と云ひ、體格から色まで間違へる程能く似てゐる上に、苗字までも同じ富士だが、唯だ一つ異つてゐるのは、伯父には鬚があるが、僕にはそれがない、然し今はもう鬘を被つて伯父の聯隊の外套を着てゐるから大丈夫だ。自分ながら驚く程能く似てゐるよ。君が時間を守つて來て呉れたのは誠に難有い、此處で會見の出來たのは何よりの幸ひだ」

筑波「ナニ會見て……ぢや何か美人が君に依賴したのか」

武夫「美人て……何だ其の美人と云ふのは美人がどうかしたと云ふんか」

筑波「アヽ失敬々々、君だから打明けて話すがね、實は今晩某美人……廂髪のハイカラが會見を申込んで來たので、今此處にかうして待合せてゐる所なんさ」

武夫「美人……ヘヘヽヽヽ」

筑波「何がさう可笑しいんだ」

武夫「可笑しいぢやないか、君が美人と云ふのは僕んだ」

筑波「エヽ、君……眞か」

武夫「嘘を云ふものか、彼の端書は僕が出したんだ」

筑波「アヽ失敗々々、何だか邪魔に擱れたやうだ、……何で君は手紙の裏に署名しないんだ……僕のやうな廂髪のハイカラ連に好遇る者にや、常も此樣手紙が來るんだから氣をつけて呉れ給へ……然し出來たとは今更ク〳〵云ふても追付かない、惡く思ふて呉れ給ふな……しィ君の用事と云ふのはなんだ」

武夫「マア、逡巡しないで居て給へ、他人に見付からない内に、委細を話して、君の助力を仰がんけりやならんのだからね」

筑波「宜しい、大いにやる……が、今は駄目だよ、非常に忙しい用事があつて、是非行かにやならん」

武夫「さうか……今は駄目、ぢや君は僕の事を知らんと云ふのか、是非な用事何だか怪しいぞ」

筑波「富士君、オイ君、マアさう云はんで呉れ給へ、甚だすまないが、實は待つてゐる人があるんだ」

武夫「何處で」

筑波「筑地の紅梅館で」

武夫「紅梅館……妙な……彼の魔窟に、益々可笑しい、怪しい用事なんだらう」

筑波「さう致弄すな、今日は君の伯母樣に逢ふ機會を得たから一寸往つてお目に懸つてお禮を申して來るんだよ」

武夫「ぢや仕方が無い、それではね、僕が此處に待つてゐることを妹に知らせて、一寸來るやうに云つて呉れ給へ、然し僕の名を言ふちやいかんよ、可いか」

筑波「分つてる、春子さんに會つて緩つくり話してゐる暇はないから、誰かに傳言をしてやる、春子さんは美人だ、僕は非常に愛してゐる、崇拜してゐるが、他ではゐないから心配するな、失敬するよ」

第三場

富士武夫、上野森太、

武夫「浮氣な奴だ、出齒龜だね、何んで彼奴等の世話になるものか、唯だ一時隱れる爲めの手段として知らすだけだ。恐らく自分を追跡して來る者はあるまい……あゝ戀しい、懐しいと思ふてゐた菊江さんにお目に懸ることの出來るのは、實に嬉しいわ」

森太「旦那樣、貴下は眞に、幸福な方でございますね、戀人に逢ふなんて、私なんかは(歎息しつゝ)嫌な婦の顏を見るよりか早く除隊に行て氣樂な獨身生活がしたい」

武夫「靜にせんか、そりや其處に妹が來たぢやないか」(つゞく)

個人消息

▲田中正造翁　(石川宛)

△此際、機會を得て、篤く御高說を伺度事存來予老躰も亦大に考る處ありますのです△今日は一筋繩で食てる時では無い、よほど愼重に永遠に耐忍に研究せねばならぬ△ヤヘリ神なるもの丶、處在を明に確かめ度き位は老人の今の程度です△但し自分だけでは神の存在は認めて居るのですけれども亦特に智識上よりして深く實際に及すの大必要よりて御高話を敬承せんと欲す、頓首

ヤ々五日、今夜は日暮里なり　又無邪中　正造

▲深尾韶氏(興津より)

先達ては失禮いたしました、御心配を掛けました小生に係る電車値上反對兇徒聚衆事件去る十九日東京控訴院に於て禁錮壹年六個月、但し病氣の爲め五ヶ年間刑の執行猶豫といふ判決を得て事落着、翌二十日無事歸鄉致しました御安心を乞ふ

▲内山愚童氏(箱根より)

久しく御無沙汰いたしました、一月以來、縣下を旅行して卅二日目で、昨夜漸く歸宅いたし、留守中の郵便物を調査して驚きましたのは御老母の永眠紀念號でありました、思へば昨年の秋、御厄介になりし折、貴姉が私の母は百までも生きましやうと其平生の壯健を誇られしも、いまはわだでとに相成候死生は人事の常なれば、御力おとしなとのわるべき筈は無きとと、貴姉平生の修養にて愚察仕候親といふ重任を負はれながら、わの御運動に獻身なされし姉が、今後の働きぶりとそ嘸かしと僕は批評眼を以て眺め居り申候　(二月廿二日)

▲伊藤證信氏(福山より)

拜啓　餘寒難去候處、如何御起居被遊候や、いつもながら主義の爲健けなる御奮鬪、敬服之外無之候、先きに御母堂御逝去被遊候由御悔申上候、小生不相變良心に背き勝の煩悶生活を營み居り候、石川兄によろしく御傳言被下度候(二月廿四日)

▲添田義治氏　(石川宛)

「空裡光」實に感謝の中に拜讀致しました、小生の信仰が、所謂ドグマ的の信仰に滿足が出來ないで居つた矢先とて、實に有り難く拜見致しました、小生の友人で彼て先生の「虛無の靈光」を讀みたいと日ふて居た男が「空裡光」を讀んで非常に發見する所があつたと申して居ります。小生の信仰は先生の所說と異る所がありませんが、唯先生の御說がヨリ多く主觀的で、且つ自力的であるまいかと思はれますのです。或は私の識見がせまい爲にさう見えたのかも知れません。然し主觀と云ひ、客觀と云ひ、神、我、自力、他力、皆唯一無對の道に歸するのですから、別にかまいはありません

▲村田四郎氏(興津より)

大變御無沙汰致しました、去年の暮から躰を惡くして、一月中旬に此所に轉じ、先月末に歸へる積りの所又一月療養する事になりまして、今月一杯此所に居る積りに致しました。福田さんの御老母御永眠の由雜誌にて拜見、未だ御悔みも申上ませんよろしく御傳へを願ます、大兄の御身に御變りはありませんか、世界婦人でまた裁判に御出掛けの由、誠に御うるさき事と御察し申上ます、御苦勞感謝の外御座いません、用も無き僕等が安閑たる事申譯け御座いません：病氣のせいか、頭が痛んで此れまでドウも讀書が出來ませんでした、が、此頃大分よくなつてポツ〳〵初めました、倫理の權威絶對的命令の性質といふ樣な事を僕は全く否定し得ないかの樣に思ふので、研究したいと思つて居ます(石川宛)

▲冠木恒夫氏(舊姓安形氏大阪より)

在京中は一方ならぬ御厚情に預り、難有奉萬謝候、先年日刊平民新聞終刊式に臨み、其後間もなく止むなき事情のため故山へ歸省、養家との關係を絶ちて原姓に復し、直ちに上京の心組に御座候處、祖母死去やら外に色々事故出來致し、殊に老ひたる母と年少き妹の二人のみなれは、只自分の意のまゝに上京もでき難く、乍遺憾草深き片田舍に蟄居致居候處、先月より當地に參り晩學ながら英語夜學校へ通學致居候、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

色即是空

無一庵主人

○政治と宗教

宗教的事業を去つて政治的事業に赴けりとて之を堕落なりと言ふ可らず。政治的事業を去つて宗教的事業に赴けりとて之を向上なりと言ふ可らず、羨ましきは唯だ、純潔なる信仰の上に我自身を置かんことに在り。尊ときは唯だ、有限の身を以て無限の中に生くるに在り。

○事業と精神

純潔と不潔、有限と無限、虚偽と眞實、是等は固と事業上の差異に非ず。精神上の差異なり、宗教的事業なるが故に、必ずしも純潔、無限、眞實の事業なりと言ふ可らず宗教も一の營利事業なることあり。不潔、虚偽の上に立てる罪惡なることあり。問題は手のことに非ず、口のことに非ず、腹のことなり。眞實、清潔の腹より出でたる行爲は竊盜と雖も善事なり。

○商業と農業

近時、人多く言ふ、商業は罪惡なり、農に就かざる可らずと、アルコールを飲むは罪惡なり、葡萄酒を飲まざる可らずと謂ふと同意なり。然れども、葡萄酒中或は多くアルコール成分ある無きを保せず。アルコールと雖も良醫の匕に終らるゝ時は即ち奇効を奏す。平生の葡萄酒は贅澤品なり人多く葡萄酒を飲む能はざるの時、獨り之を飲まんとするは人情の忍びざる所なり。されど亦アルコールは時に必須品なり、之に依て人を救ひ得るの時、罪として之を斥くるは人情の忍びざる所なり。今日の社會は病患危篤に迫りて、アルコールを要するの時なり商業を去りて農業に赴かんとするが如きは是れ我慢、我慾の甚だしき者に非ざるか、非か。

○進化と宗教

進化學者曰く、人身の進化は既に停止したりと。然らば靈は如何、靈の體、素より進化てふことあるべき筈無し　換言すれば、靈とは人と萬物との不變觀の對在なり。果して然らば世に進化てふ事實は既に絶滅せしか。否らず、進化は肉自身に依て行はれず、亦靈の上にも行はれず、唯だ、智識に依りて行はる。人文史開けて以來の進化は即ち此智識の進化なり、と言ふも不可なかるべし。

○革新と靈肉

世人稍もすれば論じて曰く、革新は之を靈界よりすべしと。亦た他の人は論じて曰く革新は之を物界よりすべしと。何れも正しからず　吾等は靈をも物をも、之を革新することは絶對に不可能なり、吾等は唯だ、靈鏡の上に現はれし智識を以て物像の上に現はれし形式を改革し得るのみ。然り、革命の、改良の、犠牲の、獻身の、正義の、人道の、民主の、共産の、集産の、私有の、と如何にも大事らしく叫ぶと雖ども、要するに皆な是れ影法子と影法子とが出合ひがしらの其場かぎりの御挨拶に過ぎざるのみ

○未來と現在

吾等の理想は社會の革新を希望して永久に止まず。されど吾等の安心は刻下に於て之を捉らざる可らず、富士山に登らんと欲する者は、麓の第一歩に於て既に歡ある也、登山の精神は山頂其ところに在るに非ず、登山といふ其事實に在る也。吾等の安心も亦た彼の『理想』其ものに在るに非ず。革新其ものに在る也。其第一着に於て既に歡喜あるべき也。されど革新とは、無限の水の上に起れる、有限の一波動なり。無限を解し得たる者にして始めて此有限の波動を樂しみ得べし。過去といふも、現在といふも、未來といふも、實は『無限』上に付せられたる假りの名稱のみ。

○假相と實相

然れども、假名と實名、假相と實相、の二種の事實あるに非ず。現象を實在の如く觀ずる時、現象は假相たる也。現象の名は假名たる也。現象を現象と見假相を假と認め假名を假名と識るの時　現象即實在なり、假相即實相なり、假名即實名なり、有限を有限と觀念する時、其心既に無限に住し、惡を惡と覺悟する時　其心既に善に住し、濁を濁と觀念する時、其心既に清き也。故に曰く、濁中清あり、惡中善あり、有限中無限あり、假中實ありと

◎科學的宗教と宗教的科學

科學的研究の結果と合致すべき信仰を説くは科學的宗教なり、宗教的心情を以て科學の門を開くは宗教的科學なり。前者は稍もすれば理智に走り、後者は稍もすれば情熱に走る。吾等は此他に人心の宗教的作用を科學的に研究せざる可らず。之を宗教心理學とも稱すべきか若し之に依て有限にして無限に住し、惡より善に通じ、暗より明に亘れる靈妙不可思議なる心の作用を精察するを得ば吾人の宗教的修養に便する蓋し甚だ大なるべし。而して不可思議は當然の條理となり從來迷信とせられし事實も合理明白となるべし

◎奇しき哉

されど我れ花を見て『ア、美し！』と思はるゝは奇しき哉。我れ日光に浴して『ア、心地よし』と感ぜらるゝは奇しき哉。我れ情人の手を握りてムラ〳〵と血の沸き來るは奇しき哉。我れ父母の慈愛を思ふて『アゝ、勿躰なしと』思はるゝは奇しき哉、無情なる如き天地の間にありて我等獨り有情なるが如きは何ぞや、空氣動いて風を起し物に觸れて音を發するが如きのみ。其律呂に合はゞ以て天來の美音となる、恰も天地無情の『情』、動いて節に當らば以て慈愛となり、同情となり、儀禮となり、人格の美質を成すが如し。風と空氣とは別物に非ず有情と無情とは別事に非ざる也。然れども何故に空氣動き、美音を發し、何故に情作らき、品格を成すか。眼を開けば我は瑠璃殿上に天樂を聞く　あゝ、天地の妙法奇しき哉。

本紙被告事件

▲被告石川の判決　本紙新年號の新聞條例違反被告事件は本月四日の判決にて被告石川三四郎を罰金五圓に處することとなれり

▲被告神崎の裁判　第一審にて罰金四十圓に處せられ、檢事は尚ほ輕ろしとして控訴せしが、本月四日東京控訴院大法廷にて公判開廷、事實審問の後、公安を害するの恐れありとて傍聽禁止を命じたり、聞く所によれば辯護士渡邊輝之助、宮嶋次郎、井本常作、鷲田増男諸氏の辯論は、壯絶、快絶、悲絶、痛絶、至らざる無く、盡さゞる無き有様なりしといふ。越て九日判決言渡あり、被告神崎順一は罰金百圓に處せられたり。

三越　兒童博覧會

三越呉服店にては來る四月一日より五月十五日迄同店特別陳列場に於て兒童博覧會を開き『男女兒童が平常座臥行遊に際して片時も欠くべからざる衣服、調度、及び娯樂器具類を古今東西に亘りて洽く蒐集し、又特殊の新製品をも募りて、之を公衆の前に展覧し、以て明治今日の新家庭中に清新の趣を添へんことを期する』由、顧問には巖谷小波氏あり、審査員には新渡戸、坪井（正）塚本、三島、斯波の諸博士、高島、坪井（玄）中村、黒田の諸教授あり、陳列品目左の如し。

（一）玩具、人形、遊戯具一切（二）兒童に關する圖書、繪畫寫眞其他印刷物（三）和洋兒童服及び附屬品一切（四）帽子、靴、下駄、草履及び附屬品（五）少女用小間物、化粧品及び造花類（六）節會、祭物其他兒童祝儀用品一切（七）乳母車其他乘物類（八）學校用品及び文房具類（九）體育運動具（十）兒童用椅子、卓子其他什器類（十一）和洋樂器及附屬品（十二）兒童に關する菓子及び食料品（十三）動植物、地理等の標本（十四）器物、機械、船舶、武器等の模型又は雛本（十五）保育用及び教育用器具

謹告

母永眠の爲め、諸方讀者諸君より御懇篤なる御悼詞を賜はり誠に辱なく存候、就而は一々御禮申上ぐべき筈の處何分にも雑事紛亂致し不得止、乍略儀紙上を以て御禮申上候、敬白

福田英

淚紅醫院長
醫師　一瀬鷹一
一院　日本橋區蠣殻町二丁目十四番地
二院　神田區連雀町十八番地
學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

齒科治療　自午前八時至午後十時
吉瀬齒科醫院
院主　吉瀬才市郎
東京市神田須田町二十六番地
（萬世橋内右橋町）
●藥價手術料共半額
●貧困者施療

木下尚江君著
言々句々　皆熱血の文
再版　墓場　價五錢　送六錢
五版　乞食　價五錢　送六錢
三版　飢渇　價四十五錢　送六錢
發行所　東京本郷弓町一の二　昭文堂　振替東京七六七四番

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世界の果まで知れ渡りたる獨逸ゾンネツケン

文房具と云へば合言葉の如く直ちに反響するはゾンネツケン也海外より歸朝したる諸君の手革鞄（サッチエル）及衣兜（ポッケット）はゾンネツケンの製品を以て充てり、歐米の官衙商會等の事務室の必要具は惣てゾンネツケンの供給也、世界の事務はゾンネツケンの製品賣品に由て活動すといふも決して誇大に非ず
ゾンネツケンの品は何故に此の如く世界の到る處にもてはやさるゝや、請ふ弊社の店頭に來つて其言の空しからざるを現品に就て知り給はん事を希望す

東京、大阪、京都
丸善株式會社

發賣元 逸見山陽堂
東京市日本橋區大傳馬町
（電話浪花二一五番）
（振替貯金口座三九六番）

三越吳服店 兒童博覽會

四月一日より開催

出品審査員

第一高等學校長 農學博士 法學博士 新渡戸稻造氏
日本兒童研究會 高島平三郎氏
農商務省審査官 小野喜惣治氏
東京帝國大學教授 理學博士 坪井正五郎氏
東京高等師範學校教授 坪井玄道氏
東京帝國大學教授 兼農商務省審査官 工學博士 塚本靖氏
女子高等師範學校教授 中村五六氏
東京美術學校教授 黒田淸輝氏
東京帝國大學講師 醫學博士 三島通良氏
東京帝國大學教授 工學博士 男爵 斯波忠三郎氏
兒童研究會 文學士 菅原敎造氏

會長 日比翁助
顧問 巖谷小波

最新式
大聲寫聲機
但七吋、十吋、十二吋兼用
●特價參拾參圓
〔普通賣價四拾五圓〕

最新文明の利器は殆んど人力の意表に出づ本機の如き即ち其一證にして一たび之を用ゆれば發音明晰高調にして殆んど神に逸るものあり弊堂今回大方各位の寵眷に酬ひんが爲に特價を以て販賣せんとす但し個數に限りあり豫定に達すれば直ちに發賣を停止せざる可らず冀くば愛顧諸君此際速に尊購を給うて利器を逸するの悔を招かざらん事を

東洋一手 大阪賣元 **天賞堂本店**

最新發明寫聲機用
發音調和器
（特價貳圓廿五錢）

機詳解

◎定價 △一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓△申込は總て前金の事
發行兼編輯人 東京府豊多摩郡澁谷町角筈七三八番地 石川三四郎
印刷人 東京市牛込區赤城下町五六番地 井口正之
發行所 東京府豊多摩郡澁谷町角筈七三八番地 世界婦人社
印刷所 東京市神田區豊島町廿四番地 博眞堂